

38. 二つの博物館巡り

コロナウイルスの感染者が増加するニュースの中、梅雨がいつになっても明けそうもない鬱陶しい中、近くの青梅市の二つの博物館巡りをした。車で行く分には手軽で気分転換にも良い。青梅市郷土博物館と青梅の津雲邸である。どちらも開催中の企画展は新聞記事で知った。

郷土博物館は「青梅宿の才人～山田早苗と小林^{てんえん}天淵～」の企画展を開催中。二人とも江戸後期に活躍した青梅生まれの文化人だが、目当ては、本の名前だけ知っていた山田早苗（1773～1855）の「玉川^{そげん}泝源日記」（序は天保13年（1842）初冬で70歳のとき）の原本を見ることだった。この日記は多摩川の源流を探す旅をした際のもので、原本は1903年から行方知らずで「幻の本」と言われていたが、古物商で扱われているのが昨年見つかったという。カラーの図も展示されていた。府中市郷土の森博物館の所蔵ということだ。他に「永久^{えいきゅうでん}田家^か務本^ぶ伝^{でん}」という、どこで読みを区切ってよいかわからない書物なども展示されていた。小林天淵（1778～1863）は青梅仲町で酒店を営み、隠居後に詩や書画、俳諧などで活躍したという文化人。いくつもの山水画などが展示されていた。



「玉川泝源日記」の中の図
（青梅市郷土博物館のHPより）

津雲邸に行くのは2回目。幕末維新展「志士たちの軌跡」を開催中で今は前期。後期は9月25日からで内容を入れ替えて展示するという。パンフレットには「今回は新しい時代の到来を見ることなく夭折した久坂玄瑞、雲井龍雄、平野國臣などの書状・書画のほか、関連史料を展示」とある。見学すると非常に内容の濃い展示だった。それに津雲邸の方には懇切丁寧な説明をして頂き感激した。前原一誠の「水静遊魚楽」、久坂玄瑞の「此のらん（蘭）は何と名付けてよかるらん（蘭）一心不乱（蘭）と云い當て鳧」の書は書き写したが、他は沢山ありすぎて書き写せなかった。

また、近藤勇愛用の木刀は、特別に持ってみてくださいというので持たせてもらった。一刀は型を行うものとかで思ったより軽かったが、もう一刀はどっしりしていた。

勝海舟の掛軸「七言律詩」は撮影の許可を頂いたので、その写真を見ながら内容を記したい。難しい語が並んでいる。

罷推試彈拂雲琴 一聲誰知清濁音
只比古松生青嵐 半窓月落影沈々
置琴弧坐寒長吟 昔人既逝無古今
存亡月臨感彌深 正鵠千載不傑心

戊辰晩夏（慶応四年六月） 海舟 勝義邦

解説には、「四月に無血開城を成し遂げた後の六月に即興で書かれたもの。窓から月が見える夜、無血開城を成し遂げ、江戸を焼かずに済んだことを誰か知ってくれるだろうかと、安堵した海舟の気分を詠っていると思われる。（この少し前に、徳川家達の宗家相続と、駿府藩主70

万石を与えられている) 即興で下書きをせずに書いたため、“置琴弧坐の^次に寒を入れる”ことと、“存亡月臨感彌深”の一句を追加する推敲の記^述がある」とある。歴史的な大業を成した後の海舟の心情を伺い知る貴重な資料だと思った。

雲井龍雄の展示されていた書を見ると「か細い」字だった。27歳で政府転覆を図ったとして新政府側に斬首され、^{きょうしゆ}梟首されたというから、強い使命感をもって生きた人のような。漢詩を得意としたともいう。藤沢周平の「雲奔る」は雲井龍雄のことを書いたというから読んでみたいと思った。

短い時間だったが、久しぶりに楽しい時間を過ごせたのはよかった。

多摩川の源流を「玉川沝源日記」はどのように書いているか興味があったので、『玉川沝源日記』(稲葉・滝沢校訂、慶友社、昭和 45 年)を図書館から借りて読んでみた。この本は原本が不明の時期の出版なので、写本をもとにしている。その為か文章のみで図はない。

現在、多摩川の源流は山梨県・埼玉県の県境にある笠取山(1953m)山頂の南斜面下の水干を源としている。私は都合 3 回友人と行っているが、そこから出る水は一の瀬川となり、途中丹波川と名が変わり奥多摩湖に注いでいる。

『玉川沝源日記』の源流探しの最後の方の文は、次のようなものである(少し意味のわからない個所や地名の不明個所あり)。今から 178 年前に多摩川の源流が明確になったということだが、当時は笠取山の水干まで確認した訳ではなく、もっと下流の一の瀬川や三重川原(三条川原、今の青梅街道の三重河原辺りをいうのだろうか?)であった。

* * * * *

廿六日(天保 13 年 9 月)、境、原、河内、麦山、川野、留浦 東は武州多摩郡、国塚、御代官の榜示杭たちたり。西は甲州都留郡 鴨沢村なり。親川山の九十九折りをのぼるに、紅葉の染めたる盛りにて、麗しさ、見上げ見おろしたるひまより玉川 丹波川とも云、この辺は川幅いとせまし の流れに紅葉の散り浮かめるを――

もみちばを散らせる風が手作りの錦をさらす玉川の水 早苗

紅葉の夕映えにいみじきを一枝手折りて(略)

翌菊月(9 月)廿七日の空のどかなり。しるべの狩人は用心に鉄炮たづさへて、火縄ふりたてて、さきに立ちゆく。割子をもたせけれど、一夜たどるべくと思へば、^{かへいひ}餉のかはりに米を袋にいれてもたせつ。さて、三、四町ばかりゆきて、丹波川の上の方の瀬々細く流れたり。石をつたひ、わたりゆくに、一瀬はいみじく激浪に見渡されて、わたり三間ばかりの所に広さ一尺五寸ばかりなる板一枚、^{ひとせ}橋にかけわたしたり。これを若人はこともなく渡りけれど、予は老の足元のおぼつかなければ、いかにせんとためらひける。この下の程、四町ばかりゆけば、よき板橋かかりたれば廻り給へといへども、いかにこれらを渡らでやとはと、しるべのものと^ず従者を力に渡りゆく。半ばかりに板たわみゆき、揺れうごきて、おそろしう思ひつつ、渡りはてて、いきいでつ。

それより^{かひざは}峡沢山といふ高かる山のつづら折りをのぼる程に、木ども更になき芝山にて、所々に清水わき出づるが見渡さる。をちこちなるが次第に流れ合ひて、麓にいたりては峡沢（いま貝沢）といふ小川になりて、丹波川に会せり。さて二十町ばかりゆきて、峡沢山の一つ家といふあり。立寄るまへに、畑作りたり。いささか平地あり。馬も飼ひたり。そこよりさがしき*坂をのぼりて、横端といふ岨道をゆきて、舟越山といふ小峰のたわに至る。

ここにもいささか畑を作りて、大豆の立枯れたるがみゆ。（略）老の夫婦住たり。丹波山より二里余。立寄りけるに、鉄炮掛けてみゆ。あるじの名を問ひけるに、定吉といひて、年は七十五歳になりぬといへり。茶を乞ひて、割子を取り出して喰ひぬ。おほば（御婆）が桃をとり置きたりとして、籠にいれたるを給はる。柔かにて、味はひいみじ。いまでも枝になりてありと云。

世の常の味はひならず山人の三千とせもへん桃にぞあるらん 早苗

又、この山のあなたに、清吉といふが住めりと云。打越え、さがしき坂をくだりて、三重川原に至る。かく分け入りぬるは、幽谷の細流れにて、すさまじき処なり。予が思ひわたりぬる願ひは成りにけれど、^{あわがぼくいたむ}嗟我僕痛、^{なんぞうなる}何吁 かな。岩根は落葉に埋もれ、いばらなどかきわけつつ二町ばかりゆきて、大巖ひとつ細流れをせきたり。さるを、大岩の上へ一丈あまりよちのぼりて、まず、しるべのものにその谷川を問ひけるに、一の瀬川と云。この上に一の瀬村といふあり。そこの山より出づる谷川なりと云。見るに、浅瀬にて、底もよくみえすく。三、四間ばかりの広さの石川なり。

その西の方のさがしき山そばだてりし山と山の^{かひ}峡の細き岩間をめぐり落つる滝川あり。その広さ五、六尺、峡きところは三、四尺ばかりにみゆ。是を黒川と云。是、黒川山の金山のもとより流れいづる水なり。落ち落ちて、一の瀬川に会せり。その水をむすびつ。磁石すゑて、方角をしるしつ。しばし見渡しつつ、そこより五、六十間ばかりを川に添ひてくだりて、山と山の間よりコロモ川 幅五、六尺許り、山澗より流れいでて、一の瀬川に会せり。これを合はせて三重川原といふならん。ひとつ谷間に流れあへど、出づるところは山をへだてたり。さる水をおのおの尋ねなば、みな山々のいづみの流れあへるなるべし。かの「群^{ぐん}源^{げん}暮^{くれ}叩^{たた}谷^{きて}心^{たに}寒^の」といへるも思ひ合はせつ。ここをこそ濫觴*といふならん。

尋ね入りみなもとみれば元にしある甲斐の深山の岩清水かな 早苗

また見んことのかたければ、よく見渡しつつ思ふに、既にこの山路に分け入るはじめ峡沢山をのぼる程に、所々にいづみ湧けるが流れくだりて、次第に流れ加はりて、まのあたり麓にいたりて、峡沢といふ三間ばかりの広さの川となりて、未は丹波川に会せり。

*さがしき：険しい。*濫觴^{らんしょう}：物事の起こり。始まり。起源。

* * * * *

(2020年7月27日)